

## 令和4年度 共通教育アンケート（1年次生対象）実施報告書

大学教育センター  
全学共通教育部門長 今井 航

### 1. アンケートに対する学生の取り組みと周知方法について

令和4年度の学生対象の共通教育アンケートは、共通教育を中心とした学修についての、自由記述を含む41項目の設問により、令和5年1月6日(金)～2月28日(火)で、実施した。回答率は48.5%と、昨年度の58.3%に比べて下降した。1年次生総数の794人中、回答したのは385人である。

学部としての回答率を示すと、生命工学部67.5%（昨年度は61.1%）に次いで、薬学部59.2%（昨年度は83.0%）、人間文化学部53.3%（昨年度は52.3%）、工学部45.2%（昨年度は48.7%）、経済学部31.2%（昨年度は55.8%）の順であった。

いつものように、担任等を通じて、学生に回答を促すのに協力された学科長はじめ各学科に、まずは感謝したい。その上で、同アンケートの開始時の周知方法を工夫したり、途中経過の報告回数を増やしたりする等して、各学科長の協力を得て、ともどもに回答率の上昇を目指したい。

### 2. 所属学部・学科のカリキュラム理解度および大学教育センターの学修支援体制理解度

所属する学部・学科のカリキュラム・マップについて、14.8%の学生（昨年度は12.7%。以下括弧内の数値は比較対照のために挙げる昨年度調査の結果）は「よく理解している」、52.5%（50.6%）は「だいたい理解している」と回答しており、7割弱は理解している。

一方、「少しだけ理解している」と回答したのは25.7%（27.3%）である。「まったく知らない」と回答したのは全学で1.3%、「まったく理解できていない」が1.8%、「聞いた（見た）ことがある」程度の者は3.9%と、1割弱の1年次生は所属する学部・学科のカリキュラム・マップについての理解が乏しいと言わなければならない。

今年度の回答を学部別に見ると、経済学部の回答者のうち4.1%、人間文化学部の回答者のうち2.7%が「まったく知らない」と答えている。また、「聞いた（見た）ことがある」程度の者となると、経済学部4.1%、人間文化学部5.5%、生命工学部3.9%、薬学部6.6%となっている。

年々それへの理解度が高まっていると見られるが、一方で自学部のカリキュラム・マップについて理解の乏しい学生がかなりの比率を占めると、進級や卒業に履修が必須の科目の単位の取りこぼしなどにもつながる。引き続き、カリキュラムの編成について、より適切な説明が学生に対して行われることが望まれる。

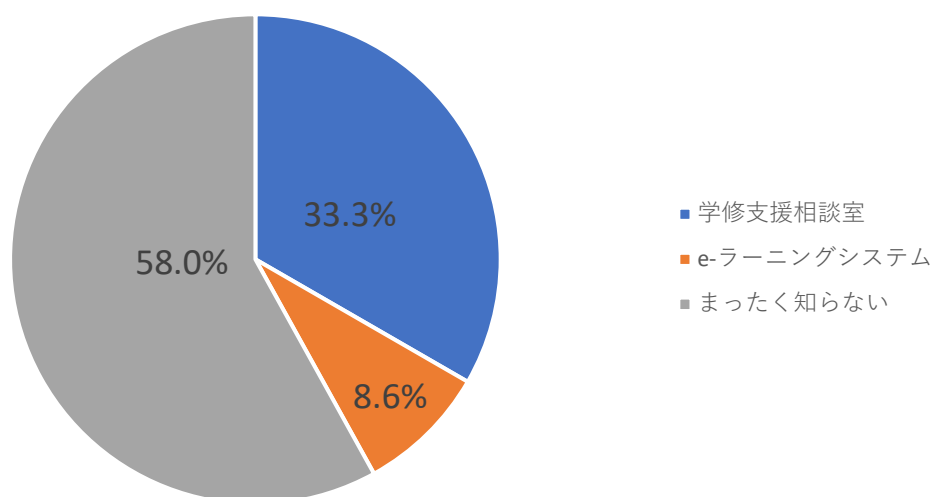
次に、大学教育センターが行っている各種の学修支援に関して、「まったく知らない」と回答した学生が回答者全体の58.0%（52.7%）にのぼった（設問2）。平成30年度のこの比率は35.5%であり、その後、周知方法の改善を試みたものの、令和元年度は却って増え、令和2年度はコロナ禍の下で対面の指導が制約を受けたことも影響したのか、さらに増えてしまった。昨年度は減じたものの、今年度はまた増え、まだ半数以上は知らないという結果である。

学修支援相談室について知っている者については、昨年度の38.8%から今年度の33.3%へと減少したが、その割合は一昨年度に比べれば、まだ高い。eラーニング・システムについて知っている者は、8.6%（8.5%）に留まった。

数学については、個別指導が行えるように、大学教育センターの特命講師が工学部生にはとくに焦点を絞って指導を行う措置を講じ、今年度も、特別のオンライン教材も利用するな

ど、並々ならぬ努力が重ねられ、その利用は増加傾向にある。

設問2 大学教育センターの学修支援について知っているものを選んでください。



学修支援相談室を知っていると回答した 112 名に限り、その利用度を尋ねたところ、「まったく利用したことがない」が 95.2%にものぼり、「よく利用している」0.4%、「まあまあ利用している」1.6%、「たまに利用している」2.8%に留まっている。

学修支援相談室を「まったく利用したことがない」と答えた学生が挙げた利用しない理由は、「利用する必要性がない」35.4% (39.5%)、「場所が分からない」30.3% (28.5%)、「時間が合わない」12.0% (8.9%)、「個別相談に不安(抵抗)がある」7.8% (8.7%)、「職員室のようで入りづらい」7.1% (7.5%)、「他人に知られたくない(周囲の目が気になる)」4.5% (3.8%)である。自由記述欄に「存在を知らない」「初めて知った」「何をサポートしてくれるのかわからない」とあるように、利用者を増やすためには、例えば入学間もない時期によく知らせることが必要であると思われる。その一方で、e-ラーニングシステムに関して、自由記述欄には「自分のペースで知見を深めることができる手段が提供されている」「何回でも出来る」などのコメントが書き込まれていた。

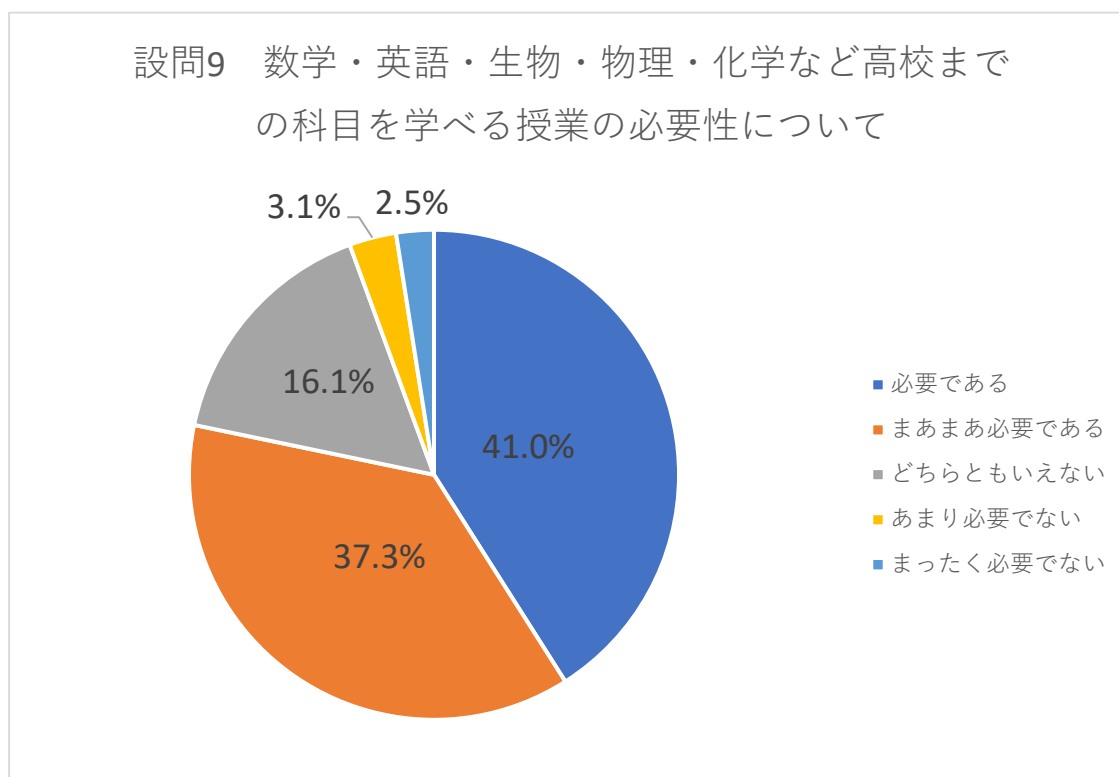
今回の調査からは、利用したことがある人へ良かった点を尋ねるようにした。そこでは「親身になって自身の学習の悩みに寄り添って相談を聞いてくれた」「分からないところをわかるまで教えてくれた」「数学で分からないことがあり行ったが1対1で丁寧に対応してくれた」などの記述が見られた。

こうした成果も確認できることから、今後も、種々の学修支援の提供実態について、新入生のオリエンテーションをはじめとする可能な機会を捉えて周知していくとともに、気軽に訪れることができる雰囲気づくりに努めていきたい。

さらには、本当に学修支援を必要とする学生に的確な指導が提供されるためにも、大学教育センターだけでなく、全学を挙げて学修支援体制の認知度の向上に努めていきたい。

高校までの科目を復習する授業すなわちリメディアル教育の必要性については、「必要で

ある」が 41.0% (41.0%)、「まあまあ必要である」と回答した学生の割合は 37.3% (33.7%) で、昨年度に比べて幾分高い比率である（設問 9）。8 割近くの学生がリメディアル教育に対する必要性を感じており、学修支援相談室が役立つ余地は十分にある。



高校までの科目を復習する授業の必要性に関連して、「必要である」「まあまあ必要である」と答えた 78.3%の学生に、どの科目のリメディアル教育が必要かを尋ねたところ、英語が 22.5% (22.3%) とトップである。次いで、数学 15.7% (18.3%)、生物 13.1% (11.7%)、化学 11.7% (13.1%) など理数系の科目が続いているが、国語も 10.9% (9.7%) が必要と回答している。

学生が最も復習を必要とすると考えている英語について、薬学部生は 11.1% (10.5%) が「必要」と答えているが、その他の学部は昨年度と同様に、いずれも 20%以上で、比較的復習の必要性を感じている。

入学直後に行う英語プレイスメント・テストにおいても、英語力に弱点のある学生が多く見出されている。担当教員は、中学、高校での学習を繰り返すのではなく、大学生として楽しめる、また発見のあるように教材及び指導法に配慮しており、教え方を対話的にして興味をもたせるよう腐心し、再履修クラスも設定して復習的な指導を実践しているが、なおいっそうの工夫を凝らすことが求められる。

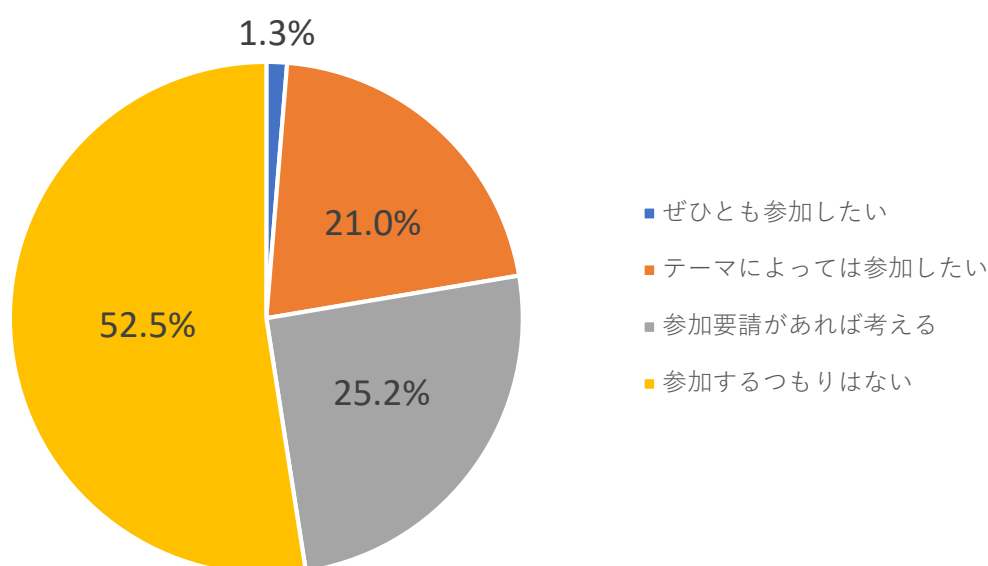
### 3. フクトークについて

大学教育センターでは、共通教育を中心として大学での学びに関する学生の生の声を聞き、教育改善に活かしていくための「フクトーク」と称する催しを毎年ほぼ年末に実施している。

令和 4 年度は 12 月 14 日（水）16:30～17:50 に大学会館 3 階 CLAF T で「インターンシップに求めるもの」をテーマとして実施し、参加した学生 23 名がグループに分かれて討議を繰り返した。

「共通教育科目などについて教員と学生が考える企画「フクトーク」について知っていますか」との設問に対して、全体の 32.7% (30.9%) が「知っている」と回答し、他の 67.3% (69.1%) は知らないと答えた。続く「フクトーク」に参加したいと思いますか」に対しては、「是非とも参加したい」は 1.3% (1.3%) に留まり、「テーマによっては参加したい」と答えたのは 21.0% (24.5%) であり、他の者は「参加要請があれば考える」25.2% (27.5%)、「参加するつもりはない」52.5% (46.8%) と消極的である（設問 12）。

設問12 上記の設問の「フクトーク」に参加したいと思いますか？



毎年、自主的に参加する学生は限られており、大多数は各学科からの推薦や指名で参加する状況であるが、参加した後の感想には前向きなコメントが多く寄せられる。この「フクトーク」における学生からの提案で、韓国語やドローンを使った授業科目が誕生した。こうした成果からも、引きつづき各学科の協力も得て、さらなる充実を図りたい。

#### 4. 共通教育全体について

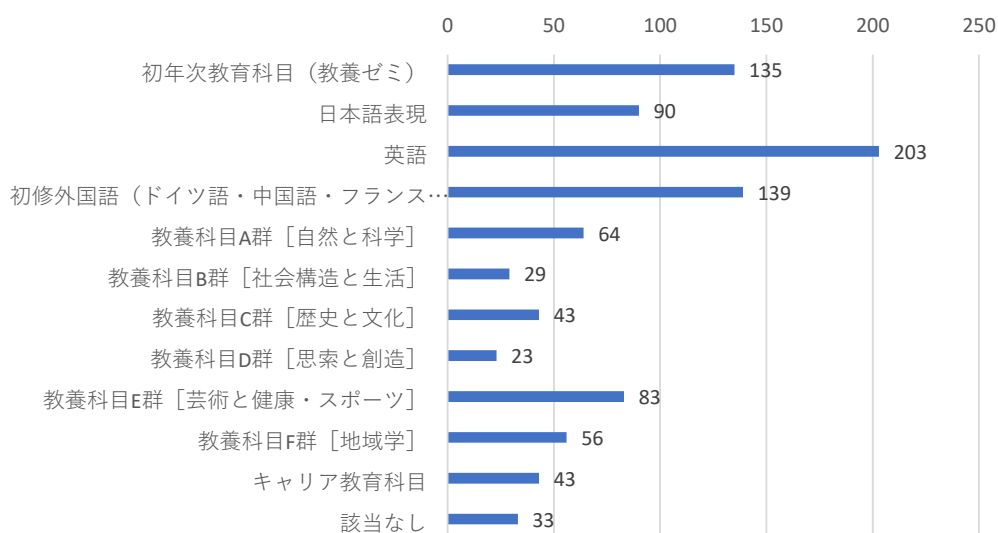
「共通教育科目で充実していると思われる科目群」は何かという設問では、上位から「英語」21.6% (20.0%)、「ドイツ語・中国語・フランス語・韓国語など初修外国語」14.8% (14.0%)、「初年次教育科目（教養ゼミ）」14.3% (15.8%)、「日本語表現法」9.6% (9.4%) と続き、教養教育科目の中では E 群の「芸術と健康・スポーツ」8.8% が最も多く、A 群の「自然と科学」6.8% と続き、最も少ないのは D 群の「思索と創造」2.4% であった（設問 13、同グラフ中の数字は回答件数を表す）。この D 群、あるいは B 群「社会構造と生活」3.1% や C 群「歴史と文化」4.6% の充実を図る必要があると見られる。

「入学当初、共通教育に期待していたこと」は何かという設問では、上位から「専門での勉強の基礎」18.9% (17.7%)、「専門以外の幅広い知識・教養」16.1% (16.2%)、「学生同士の交流」14.6% (17.0%)、「実用的な知識・技能」14.4% (14.4%)、「基礎学力の向上」

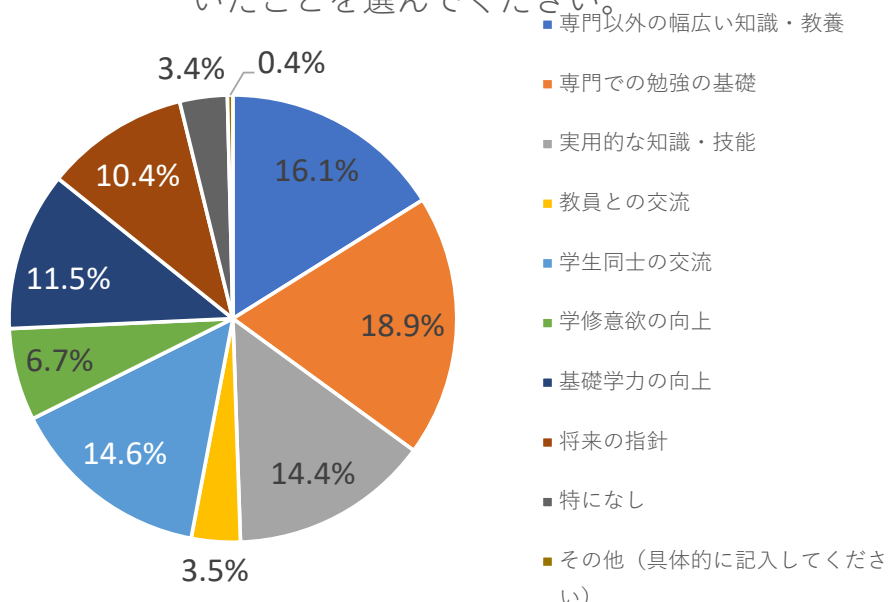
11.5%、「将来の指針」10.4%等の順になっている（設問14）。「基礎学力の向上」や「将来の指針」が昨年度よりも順位を上げている。大きな災害を目の当たりにし、また、コロナ禍に生きる、コロナ禍を過ごした、学生たちの将来に対し、我われは、これまで以上に思いを寄せる必要があるのかもしれない。

「教員との交流」は3.5%（4.8%）と、昨年度よりも下回った。コロナ禍後であるがゆえに、教員の側から積極的に働きかけることで、いよいよ本学の教員が学生に専門性や人間性において他所では得られない大きな影響を及ぼすことを期待したい。

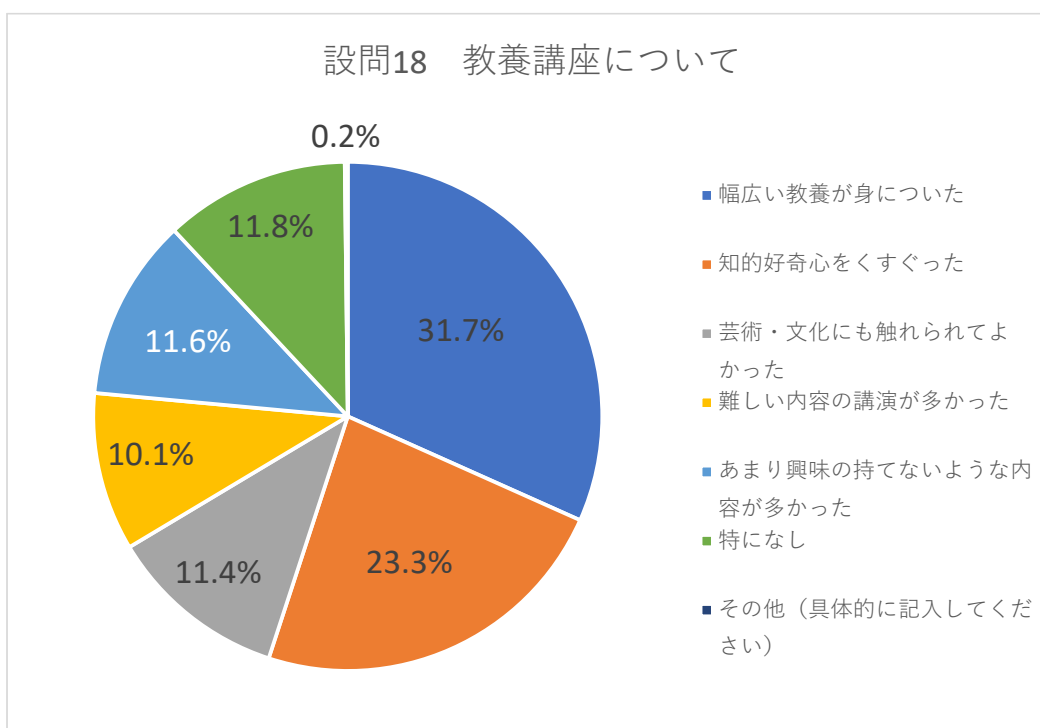
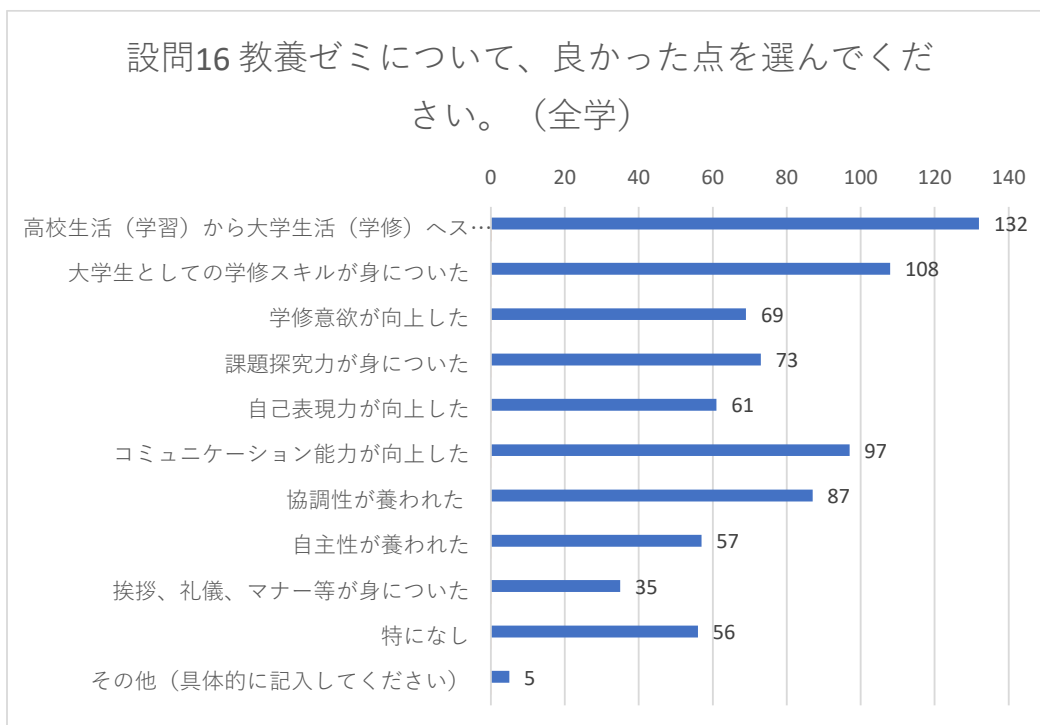
設問13 共通教育科目で充実していると思われる科目群を選んでください。（全学）



設問14 入学当初、全学共通教育に対して期待していたことを選んでください。



次に、これらの「期待内容に関して、どれほどの期待達成度あるいは満足度が得られたか」を%で回答することを求めたところ、満足度 70%と回答した学生が最も多く、その割合は 26.5%である。昨年度は 80%と回答した学生が最多であったから、この点、注意が必要である。また、満足度 100%~70%の学生の合計は、全体の 57.7% (54.7%) を占めた。この数値は、令和元年度から年々、増加しており、今年度も増加している。



初年次教育科目として開設されている**教養ゼミ**を履修して良かった点については、上位から「高校生活（学習）から大学生活（学修）へスムーズに移行できた」16.9%（14.2%）、「大学生としての学修スキルが身についた」13.8%（16.2%）、「コミュニケーション能力が向上した」12.4%（10.5%）等の順になっている（設問 16、同グラフ中の数字は回答件数を表す）。

一方、教養ゼミの改善点については、「特に改善点はない」という回答が 41.1%（45.6%）と最も高い比率であるが、これに次いで「学生の関心に対応する授業内容にして欲しい」15.4%（12.8%）、「コミュニケーションの場がもっとほしい」14.2%（14.1%）、「授業の進め方をもっと工夫して欲しい」が 8.9%といった順になっている。

教養ゼミの改善点として挙げられた学生の意見には、「レポートを書く上での注意点などをもっと細かく学びたかった」「グループワークなど同じクラスの人とコミュニケーションをとって仲良くなれるような授業内容にして欲しい」「教養ゼミでの活動が少ないように感じた」といったコメントが見られた。

本学で開学以来続いている**教養講座**に関して、昨年度に引き続いて今年度も、感染予防を重視し、この伝統的催しをオンラインで開催した。上位から「幅広い教養が身についた」31.7%（34.7%）、「知的好奇心をくすぐった」23.3%（19.7%）、「特になし」11.8%（15.0%）等の順になっている（設問 18）。

## 5. 語学・リテラシー科目について

**日本語表現法**については、「とても満足した」20.8%（21.5%）と「ある程度満足した」49.9%（50.9%）を合わせると 70.7%（72.4%）となり、概ね良好としてよいと思われる。日本語表現法の難易度に関しては、「今の程度の内容でよい」78.4%（81.1%）、「今以上に高度な内容が必要」7.5%（6.0%）である。一方で「今より少ない内容でよい」とする者が 9.4%（9.4%）、「まったく必要性を感じない」者も 4.7%（3.4%）いる。

日本語表現法の授業で良かった点を尋ねたのに対して、「日本語の基礎力が向上した」35.0%（37.5%）はシラバスで謳っている前半の目標、「文章表現力が向上した」26.5%（24.0%）と「レポート作成に役立つ」14.4%（15.3%）は後半の目標に相当するところである（設問 21）。こうしてみると、授業の目標は概ね達成されているようである。

本学の**情報処理基礎**は、1年次生を対象とした科目で、高校で学んだ情報科目についての復習と大学教育で必要な最低限のスキルを学ぶ高大接続の要素をもっている。

情報処理基礎の満足度を見ると、「とても満足した」34.5%（31.8%）、「ある程度満足した」45.5%（45.1%）と、8割の学生が満足を表明している。また、回答者の 80.8%（81.1%）は「今の程度の内容でよい」としている。

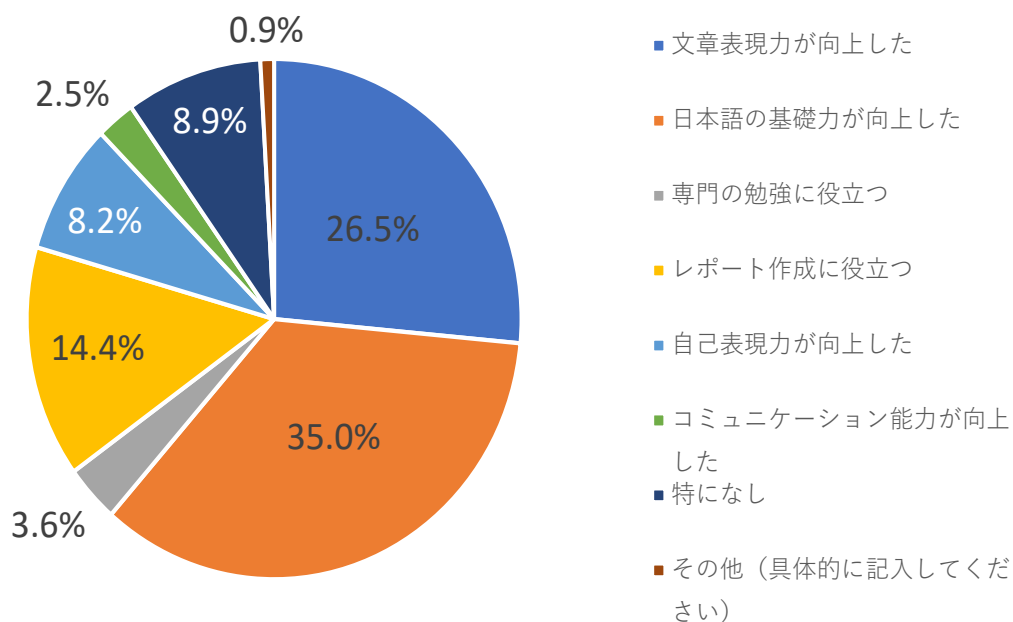
何が良かったかを尋ねたところ、「ICT を使用する技能が身についた」25.9%（24.9%）、「ICT を使用して情報収集・分析・処理能力が身についた」20.2%（17.2%）、「レポート作成に役立つ」20.2%（21.0%）、「情報倫理（情報モラル・情報マナー）が身についた」12.6%（17.7%）、等の順になっている（設問 24）。

情報リテラシーは、大学生の学修や生活にとって不可欠な知識やスキルであり、加えて SNS をはじめとする情報サービスの使用には高度なモラルが求められている。生成 AI の活用が進められようとしている今、そのスキルの熟達はもちろんのこと、モラルに適する態度形成に向けても、いっそうの充実した教育の展開が望まれる。

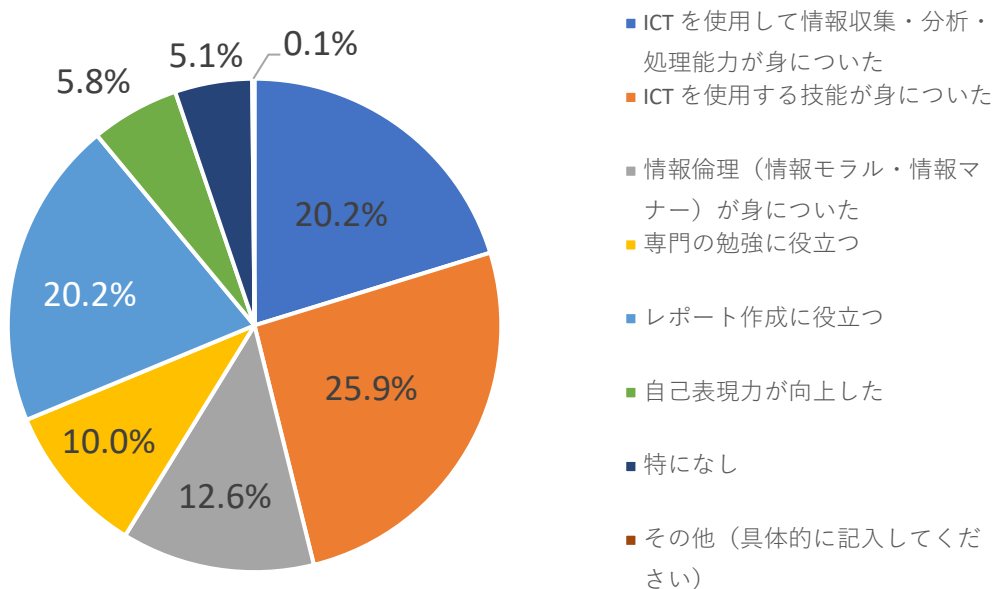
**英語**については、全学において、「とても満足した」37.4%（26.4%）、「ある程度満足した」47.8%（50.9%）を合わせると、85.2%（77.3%）が満足感を示している。昨年度に比

べて、その割合が上昇している。

設問21 日本語表現科目の良かった点を選んでください。



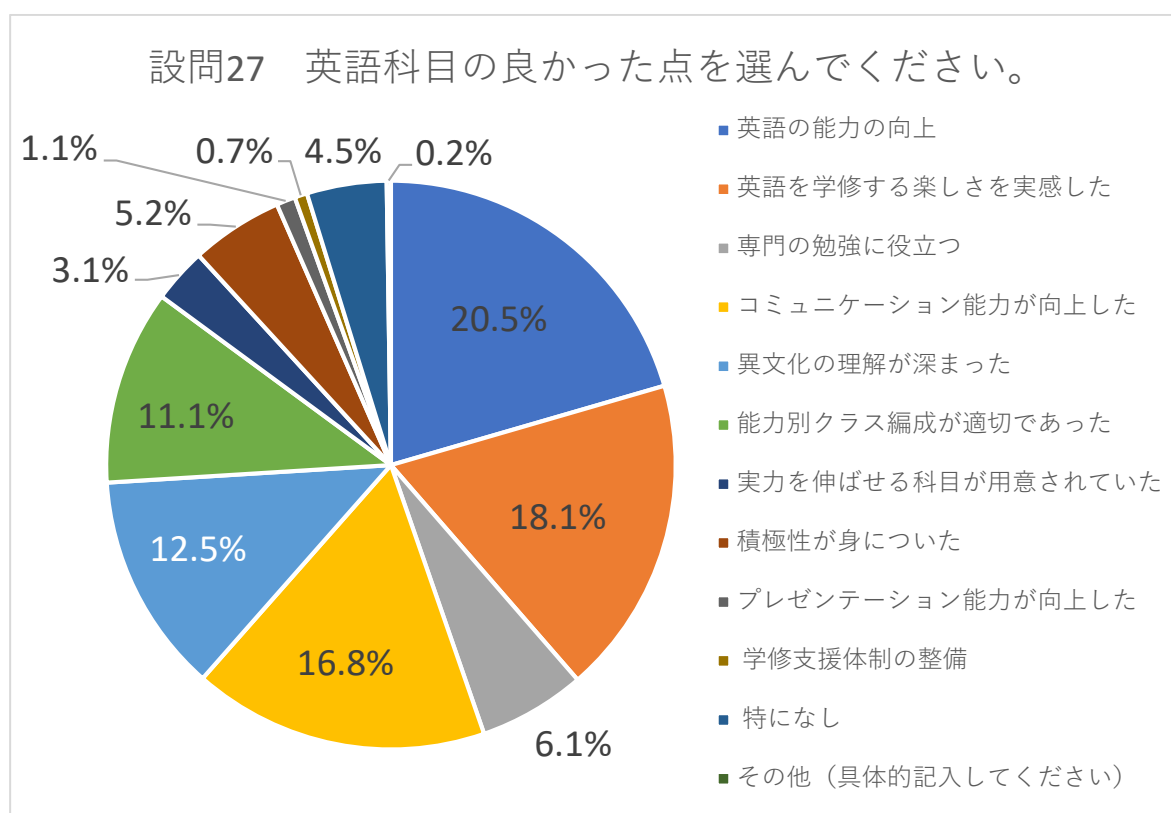
設問24 情報処理基礎の良かった点を選んでください。





「今以上に高度な内容が必要」とした学生は 11.9% (12.0%) に留まり、「今の程度の内容でよい」が 78.4% (71.5%) と多数を占めている。「今よりも少ない内容でよい」とする者は、全体では 8.6% (14.8%) を占めた。

次に、英語科目の良かった点については、「英語の能力 (辞書があれば英文を読める力等) が向上した」が 20.5% (20.7%)、「英語を学修する楽しさを実感した」が 18.1% (14.9%)、「コミュニケーション能力が向上した」が 16.8% (15.8%)、「異文化の理解が深まった」12.5%、「能力別クラス編成が適切であった」11.1%の順であった (設問 27)。



英語科目の良かった点について、自由記述欄に記入された内容を見ると「外国人の英語をたくさん聞くことができる」というオールイングリッシュで行われる授業への評価が見られた。

「初修外国語」のどの語種を選択したかについての設問に関して、回答したのは延べ 327 人である。回答者総数は 385 人であるから 58 人はこの設問に答えていない。薬学部については、初修外国語の履修を義務づけておらず、希望する者のみが学ぶことになっている。このことが主たる原因であると見られる。また、複数の初修外国語を学んだ学生も少数ながら含まれていることもありうる。

この結果、回答者を語種別に見ると、中国語が 37.6% (51.3%)、韓国語が 32.7% (24.7%)、ドイツ語が 17.1% (12.2%)、フランス語が 12.5% (11.7%) の順になる。

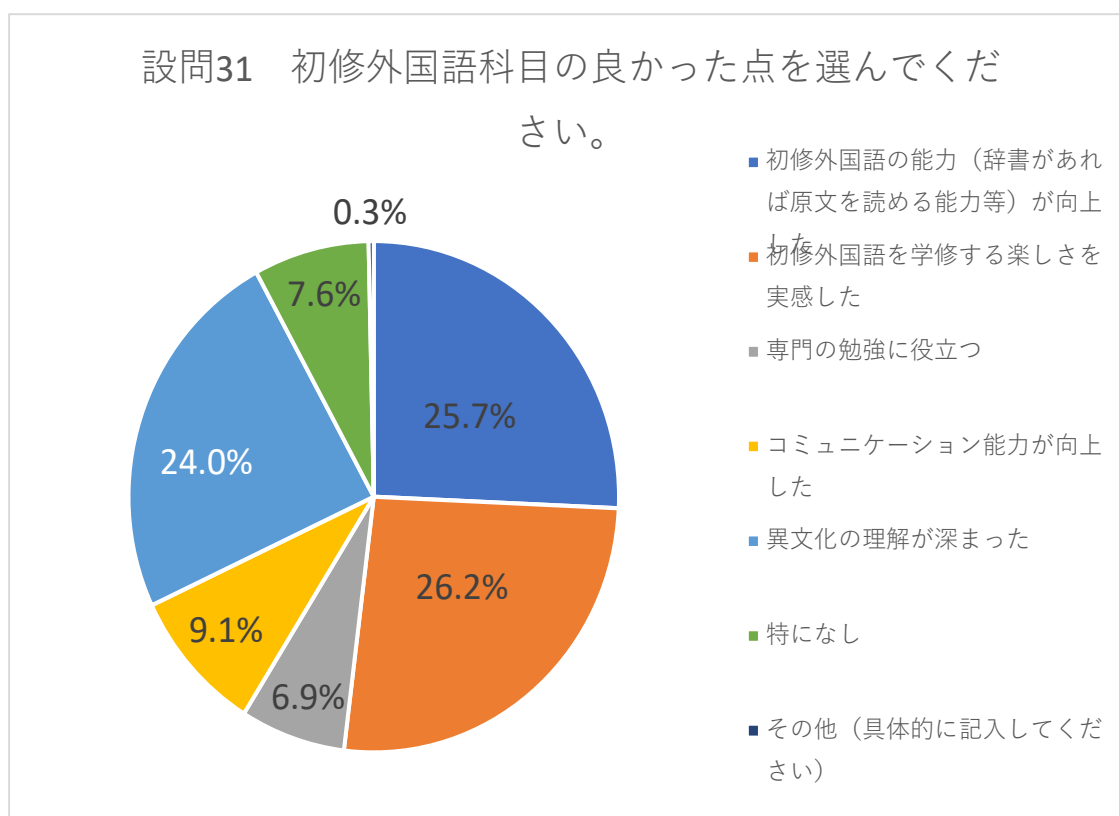
括弧内に示した昨年度の比率を見ても分かるように、初修外国語の履修は希望によることを基本としているため、年度による履修者割合の変動が起こる。平成 30 年度に新設した韓国語の履修者は中国語に次いで第二位を維持しており、今年度のその割合は上昇している。

これら初修外国語 4 言語の学修に関して、「とても満足した」は 32.8% (22.4%)、「ある程度満足した」は 45.0% (44.2%) と、あわせて 8 割弱が高く評価しており、「あまり満足

しなかった」6.4% (9.0%)、「まったく不満だった」2.1% (3.1%) を大きく上回っている。授業の難易度については、「今以上に高度な内容が必要」は3.0% (5.2%)、「今よりも少ない内容でよい」は18.0% (22.0%) であった。

多くの学生にとって初めて学ぶ初修外国語には、中高での英語学修の「しがらみ」を離れ、語学やその背景にある当該国の文化を学ぶ楽しさを伝えられるよう、教育内容や教授法に関して今後も、いっそうの工夫が望まれるところである。

「初修外国語の良かった点」については、「初修外国語を学習する楽しさを実感した」26.2% (26.0%) がトップであり、「初修外国語の能力（辞書があれば原文を読める能力等）が向上した」25.7% (21.5%)、「異文化の理解が深まった」が24.0% (23.1%)、がこれに次いでいる。「コミュニケーション能力が向上した」9.1% (7.5%)、「専門の勉強に役立つ」を選択した学生は6.9% (9.2%) であった（設問31）。



## 6. 教養教育科目について

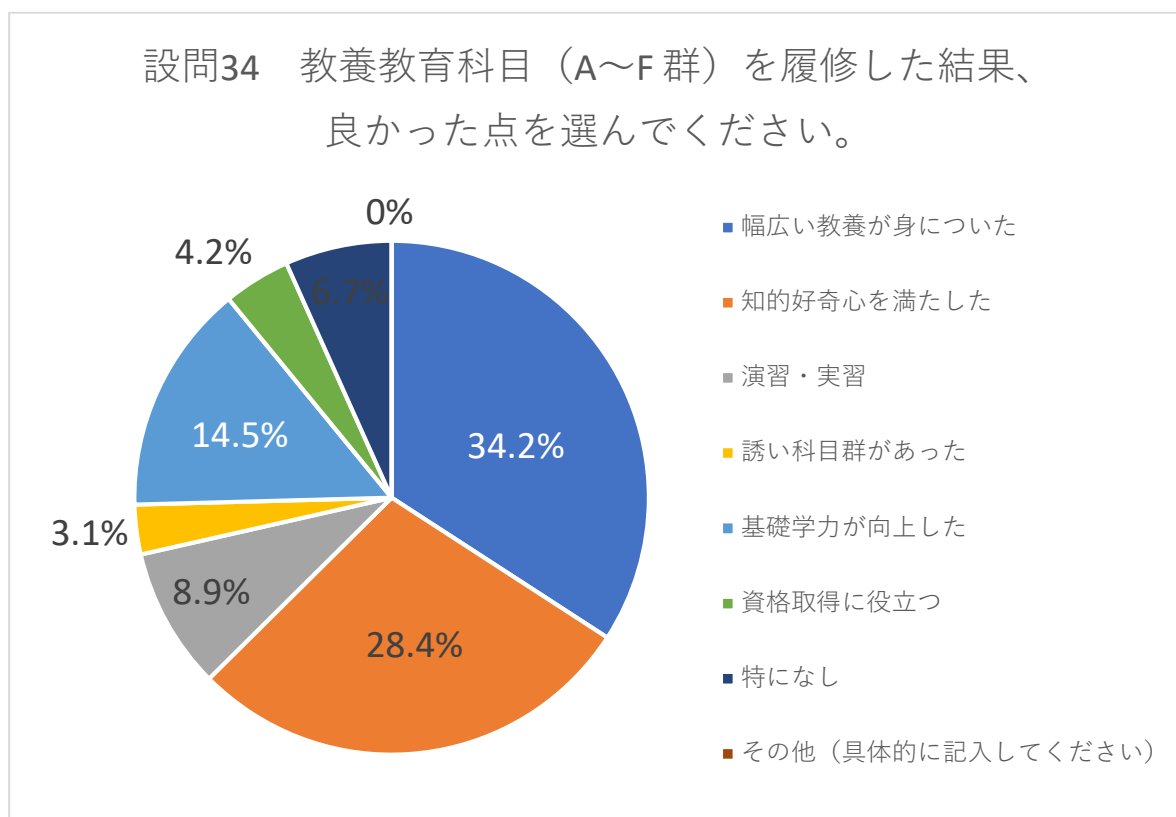
教養教育科目（A～F 群）を全体として見た授業時間数と内容について、「今の程度の内容でよい」と回答した学生が89.9% (87.3%) を占めた。「今以上に高度な内容が必要」と回答したのは5.7% (3.2%)、逆に「今よりも少ない内容でよい」と回答したのは2.6% (8.4%) であった。

教養教育科目履修の際に特に重視した点については、上位から「知的好奇心を満たす」42.6% (42.1%)、「基礎学力の向上」19.7% (19.5%)、「専門に役立てる」15.6% (17.6%) の順である。

一方で、「単位数稼ぎと時間割の穴埋め」という、消極的なねらいを選択した学生は17.9% (17.4%) と、昨年度と同じ割合であった。また、「資格取得」は4.2%であった。

教養教育科目を履修した結果、良かった点については、上位から「幅広い教養が身についた」34.2% (35.1%)、「知的好奇心を満たした」28.4% (26.2%)、「基礎学力が向上した」

14.5% (15.2%)、「演習・実習」8.9%、「特になし」6.7%、「資格取得に役立つ」4.2%、「誘い科目群があった」3.1%の順であり（設問 34）、この設問に対する回答の傾向は、この 5 年間で、ほぼ同じである。



## 7. キャリア教育（1 年次履修のキャリアデザイン 1）について

「キャリアデザイン I を受講して将来役立つ力が身に付いたと思いますか?」と、この科目に対する満足度を尋ねたところ、「とても思う」が 24.4% (29.2%)、「まあまあ思う」46.8% (45.9%) と、4 人中 3 人近くの者が将来役立つと回答した。逆に、「あまり思わない」4.9% (4.3%)、「まったく思わない」4.4% (2.8%) と回答した者も見られた。

キャリアデザイン I の難易度については、「今の程度の内容でよい」78.4% (80.7%)、「今以上に高度な内容が必要」4.4% (3.4%) という回答の一方で、「今よりも少ない内容でよい」12.5% (12.7%) や、「まったく必要性を感じない」4.7% (3.2%) と回答した学生もいる。引き続き、一年生からキャリア教育が必要になってきている社会的背景（例：就職活動の早期化・多様化など）の説明をしたり、自らキャリアをデザインすることの重要性について啓発活動をおこなったりしていくことが必要不可欠だと考える。

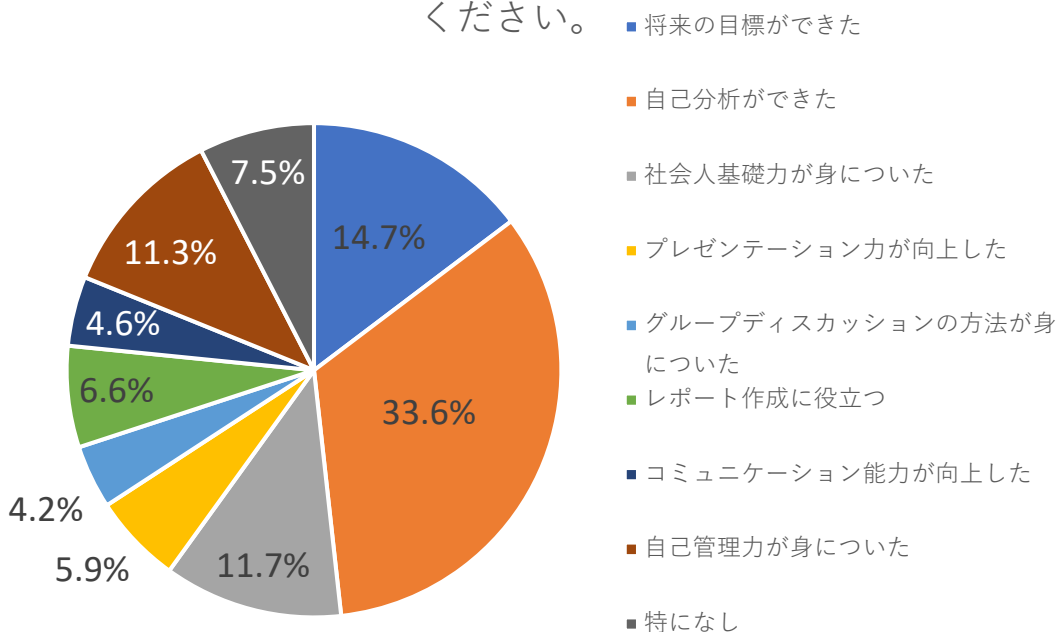
キャリアデザイン I を履修して良かった点については、その上位 3 項目を挙げると「自己分析ができた」33.6% (35.3%)、「将来の目標ができた」14.7% (11.4%)、「社会人基礎力が身についた」11.7% (15.5%) であり、あと「自己管理能力が身についた」11.3% (10.4%) が続く（設問 37）。「社会人基礎力が身についた」と「将来の目標ができた」の順の入れ替わりが、昨年度の結果と異なる。

## 8. 学生の学修意欲について

本年度 1 年次生における学修意欲についての質問項目では、入学時に「非常に意欲あり」

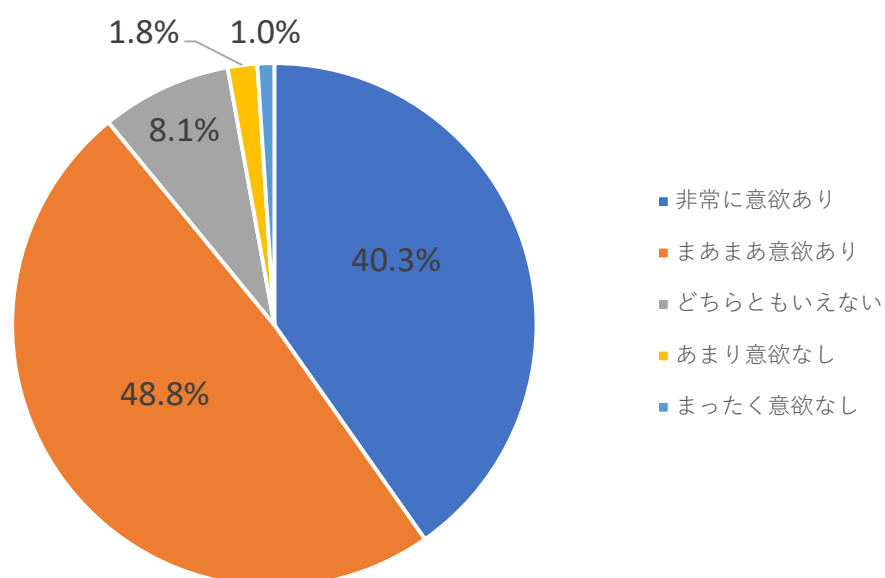
設問37 キャリアデザイン I の良かった点を選んで

ください。

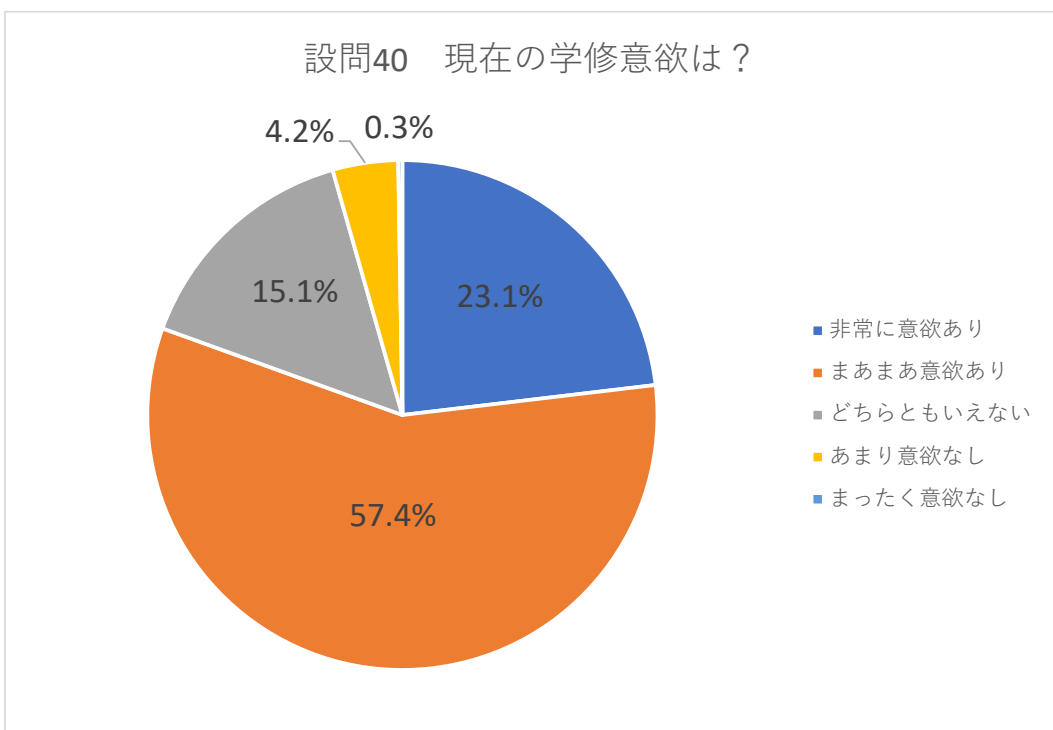
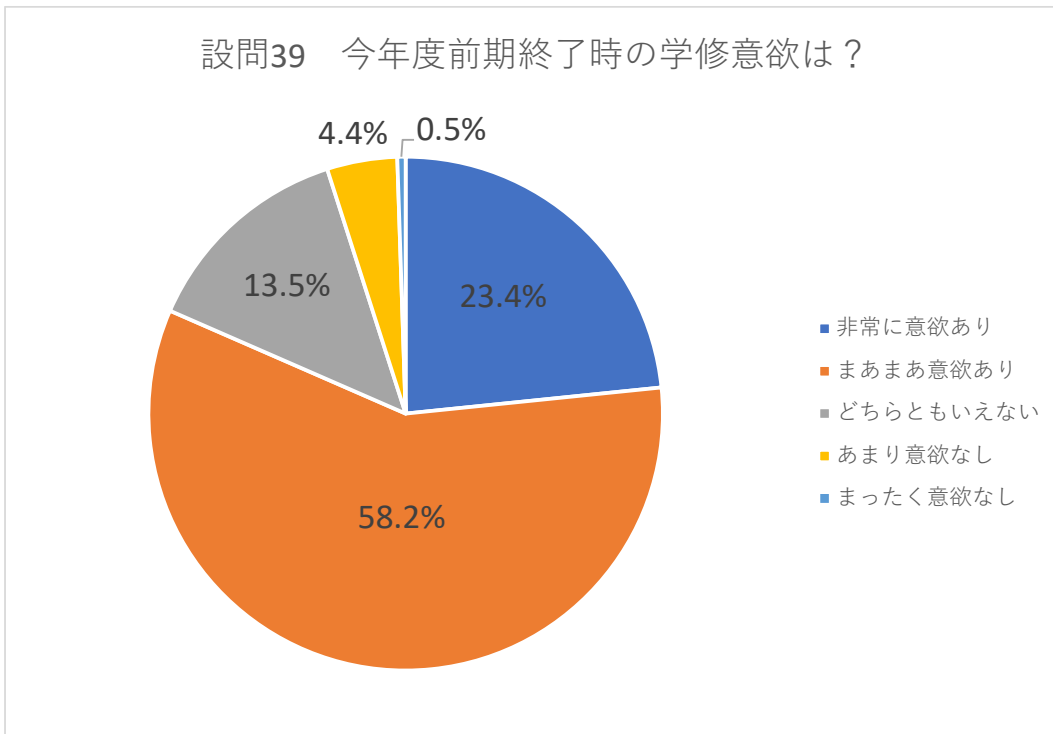


40.3% (29.2%)、「まあまあ意欲あり」48.8% (50.6%)と自己分析している。この数値は前期終了時に、それぞれ23.4% (19.3%)、58.2% (54.7%)に変わり、さらに学年末に当たる今回の調査実施時には23.1% (20.8%)、57.4% (52.8%)となっている(設問38～40)。括弧内の昨年度の数値と比較すると、意欲のある者が多く、その継続の割合も高い。

設問38 入学時の学修意欲は？



一方、「あまり意欲なし」「まったく意欲なし」と回答した学生の合計の割合は、入学当初2.8%（4.0%）、前期終了時4.9%（5.8%）、学年末4.5%（5.8%）で（設問38～40）、意欲のない状態で入学し、その後、その状態は昨年度に比べれば、その割合が低下しているものの、少し悪化していることが見て取れる。留年や退学防止の観点から、学修意欲の乏しい学生層に対する取り組みは、いっそうの改善を図る必要がある。



## 9. アンケート調査結果を踏まえた今後の改善策

以上述べてきたアンケート調査の結果を踏まえ、また、本文ではあまり触れなかった自由記述意見にも触れながら、全学共通教育の現況と改善策について今少し述べることで、本報告の結びとしたい。

まず、昨年度に比べて回答率が下降した。学生への一斉メールでの回答要請の他にも、大学教育センター運営委員会の委員である各学科長を通じて、調査への協力を学生に呼びかけて頂けるように従来どおり、お願いしたい。今後も、回答期間は延長することなく、決められた期間内で終わるようにしていく。そのうえで、共通教育科目の各担当教員や、各学科の先生方の協力を得ながら、たとえば授業時間中に調査への回答依頼を学生へ直接伝えて頂くなど工夫し、粘り強く協力の要請を続けて、回答率の上昇を果たしたい。

また、大学教育センターが行っている各種の学修支援についての認知度の低さを深刻に受け止め、改善策を講じなければならない。eラーニング・システムについても同様である。

「自分のペースで知見を深めることができる手段が提供されている」「何回でも出来る」「自分のペースで出来る」など好意的なコメントが見られたのも確かであるが、その存在自体がよく知られていないことの方が分かる記述が散見された。新入生オリエンテーションを初めとする各種の機会を捉えて、引き続き周知、広報に努める必要がある。

さらに、共通教育科目の充実度を問うたことで見えてきたのは、とくに教養教育科目のA群からF群の中身やキャリア教育科目へのその評価が比較して低いということである。とりわけ、戦争の絶えない世界、異常気象、AIに代表される先端技術の進展、少子高齢化などを目の当たりして生きる今、人間文化・社会の価値を問い、それを創造することに接近するような科目、すなわち人文科学や社会科学に関する科目の充実を図らなければならない。

一方で、教員が励まされるような記述も見られた。例えば「この1年間で高校と大学の違いや多くのことを学べたり身につけたりなど様々なことを知ったり経験したりしました。そしてこの早い段階で将来したいことなども少しずつ決まりつつあるのでとても良い1年間だったと僕は思いました」「全体を通して質の高い授業ばかりでした。来年も継続して頑張ります」「幅広い学問を学ぶことが出来て自分の認識が改められる場面などがあり、とても楽しかったです」等である。

反対に、次のような記述からは、問題点を確認し、課題を具体的に設定し、一つ一つ改善していかなければならないと受け止められた。「真面目に講義を受けない人が多すぎる。ただのサボりでも公欠を使えば許されると思っている人が多い」「初修外国語にイタリア語・スペイン語・ポルトガル語を可能であれば追加してほしいです。また、古典に関する科目もできれば追加してほしいです」などである。

前者からは、学生の教育環境をよりよくし続けることが教職員に求められていると見る。「公欠を使えば許されると思っている人」がいないようにすることも教育環境の改善の一つであると考え。そのようなことで真面目に講義を受けようとしている学生の意欲を低下させてしまうことがないようにしていきたい。また、後者からは、あらためて多様な学習・探究を期待している学生の存在に気づかされる。即刻そうした期待に応えられるわけではないが、継続してフクトークなどを通じて学生の要望を引き出し、可能なことから具現化していきたい。